戦国夢幻

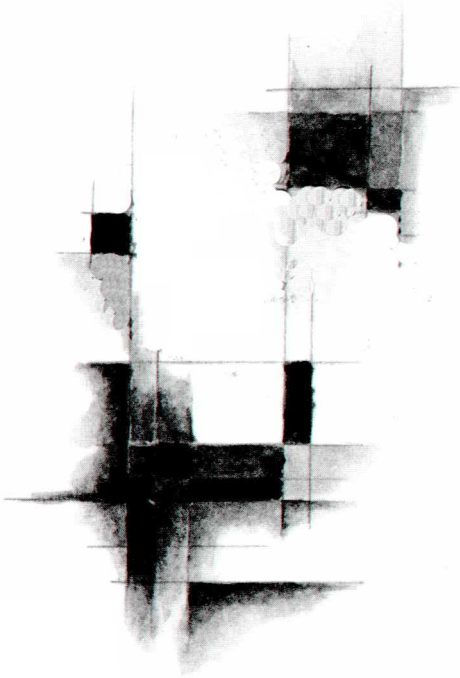
安西篤子

昭和世

安西篤子

戦国夢幻

昭和世代女流短編集 2



読売新聞社

戦国夢幻（せんごくむげん）　昭和世代女流短編集2

著　者――安西篤子（あんざいあつこ）
編集人――笠井晴信
発行人――原　四郎
発行所――読売新聞社
東京都千代田区大手町一の七の一　〒一〇〇
大阪市北区野崎町八の十　〒五三〇
北九州市小倉北区明和町一の十一　〒八〇二
印刷所――凸版印刷株式会社
製本所――協和製本株式会社
第一刷――昭和五十四年十二月十九日
定　価――九八〇円

©, 1979 Atsuko Anzai
0093—702770—8715
Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目
次

雁姫恋慕　7
紅炎の恋　43
元禄血染の小袖　67
幽霊丸江戸へ向う　95
不来方遺恨　123

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

壁上の鬼　149
おたき　187
戦国夢幻　207
あとがき　241
収録作品初出誌一覧　243
安西篤子年譜　244

装丁　栃折久美子

戦国夢幻

昭和世代女流短編集2

安西篤子

雁姫恋慕

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

一

春日山城本丸の〝怪異〟については、城内に住むものなら誰でも知っていた。

越後の雄上杉謙信の拠る春日山城は、前面に頸城平野を控え、背後に佐渡の荒海を負い、更に米山々塊や妙高連峰をめぐらす天然の要害である。

城の成立は古い。当初は越後国府の守りとして砦が築かれた。下って応仁の大乱前後には、城としての体裁をととのえつつあったと推定される。

やがて、越後守護代長尾氏の一族が本拠を置くに及んで、春日山城の名は歴史の表舞台に登場するようになった。

謙信の遠祖長尾高景も、当時はまだ鉢ヶ峯城とよばれたこの城に住んだことがあるし、高景の嫡孫で、関東公方足利持氏の遺児春王・安王を殺して悪名を天下に流した実景も在城した。

管領・守護が弱体化するにつれて、長尾一族は勢力を広げていった。そして謙信の祖父能景・父為景の代に至って、城の規模も拡大され、越後一国ににらみをきかせはじめた。

天文十七年（一五四八）、十九歳で父の遺領を継いだ景虎（のちの謙信）は、その年の暮に春日山城に入り、越後の経営に腐心することとなった。

戦さの天才景虎は、各地に転戦して勝利を得、爾来三十年、いまは天下をうかがう覇者として、

近隣諸国から怕れられていた。

春日山城は、「実城（みじょう）」と呼ばれる本丸、「中城（ちゅうじょう）」と呼ばれる二の丸、そのほか三の丸、数々の曲輪、城主の居館や宿老の屋敷などで構成されている。

戦時は別として、平生、謙信は山の中腹の「お中屋敷」に起居した。本丸には守備の将士を入れておく。

ところでその本丸内の館の一室を「不開（あかず）の間」と称し、つねにしめ切られていた。

夜中、不用意にこの座敷に入ると、闇の中におぼろに白い女の姿を見ることがある、といわれる。啜り泣く女の声を聞いたものもある、という。

それは、非業に死んだ春王・安王の母が、歎きをのべるために霊となってあらわれるのだともいわれたし、為景に攻め殺された越後守護上杉房能の夫人綾子御前の亡魂にちがいない、というものもある。

越後守護代に過ぎなかった長尾氏が、一国を支配するに至る、その過程において、怨みをのんで滅ぼされていったものは、数多い。

また、防備を第一に考えて堅牢につくられた城の内部は、柱はふとく、梁は逞しく、窓はちいさく、昼間でも薄暗い。その陰気な屋の内は、いかにも怨霊の出現にふさわしい。

女の泣き声を聞いたものがあると、その後しばらくして、必ず不吉な出来事が生じる、と云い伝えられていた。天文五年十二月、為景の没する直前にも、この怪異があったという。

豪勇の人謙信が、この種の怪談を信じていたとは思えないが、無知な将兵、あるいは迷信深い女たちの中には、本気で怨霊の祟りを恐れるものもあった。日中はともかく、日が暮れてのちは、そのあたりへ近づかないようにしている。

ところが、最近になって、また別の怪しげな風説が、女たちの間にささやかれるようになった。

この度は謙信の居館内で、奇妙な事件が発生したという。

ある晩のこと、あちゃという下仕えの若い女が、大台所へ湯を汲みに行った。その帰り、納戸の前を通りかかると、誰か立っているものがある。掛燭のぼんやりとした光の中で、それはあちゃの朋輩のやつという女らしくみえた。

あちゃは、やつが迎えに来てくれたのであろう、と思い、声をかけた。ところが、相手はなんとも答えない。それでも、やつと信じているあちゃは、かまわず近づいた。と、ようやく顔の見分けがつくあたりまで来たとき、女は忽然と消え失せた。あちゃは驚いて腰を抜かした。

また別の夜、広間の脇の廊下を歩いていたすめという若い女房が、後からくるひたひたという跫音を聞いた。軽い女の跫音なので、少しも怕いとは思わず、誰か朋輩であろう、とふり向いてみた。ところが、すぐ背後まで近づいているはずの相手の姿が、全く見えない。

その女は、あちゃと違い、いくらか武術の心得もあったので、

「そこにいるのは、誰ですか」

と問うた。

が、答は返ってこない。
それでいて、たしかにあたりの闇の中に身をひそめているものの気配が感じられる。そして、この度は別の方角から、再びひたひたと近づく、さっきと同じ跫音を聞いた。
ここですめは、先ごろあちゃの出会った怪異を思い出し、にわかに背筋を寒いものが走った。さすがに悲鳴こそあげなかったものの、長局へ駈けこんできたときのすめの顔色といったらなかった。
噂は、たちまち城中にひろまった。
これまでは、本丸「不開の間」を一歩も出ることのなかった幽霊が、近ごろは城内のここかしこと、さまよい歩くようになったというのである。
日がたつにつれて、怪しい女に行き会った、あるいは跫音を耳にした、というものは、ふえるばかりである。女の忍び泣く声を聴いたと称するものも現われる。
そのうちに、誰ということもなく、「あれは雁姫(かりひめ)にちがいない」と言いはじめた。
怪しい女の着衣の柄が、雁姫愛用の小袖によく似ている、と一人が云えば、泣く声がそっくりであった、と別の一人が云う。
女房たちは、顔を見合わせて、怖じけをふるった。
雁姫の悲惨な死に様は、女たちの記憶にまだ生々しい。
『頸城逸史』には、雁姫をただ「柿崎氏」としてあるだけで、父祖の名はわからない。

柿崎氏は、余五将軍平維茂の末裔と称する。維茂の三男繁成は出羽城介に任じられ、その子貞成は城太郎を名乗って、越後に栄えた。柿崎氏はこの越後城氏から分れたものであるという。その真疑はともかくとして、古くから頸城地方に根を張り、富と権勢をほしいままにした豪族であることは、まちがいない。

長尾一族が越後守護上杉氏をすらしのいで、しだいに勢力をのばしはじめると、しばしば柿崎氏と衝突した。謙信の父為景の晩年には、柿崎氏は上条定憲を助けて為景と戦い、為景は追われて春日山城に逃げこむ始末だった。

しかし、謙信の時代になると、柿崎氏はその勢威に屈服しなければならなかった。柿崎和泉守景家は、勇猛をもってきこえた武将だったが、謙信に臣従し、川中島の合戦はじめ、各地の戦さに先鋒をつとめている。

柿崎氏の本拠は猿毛城におかれたが、その他、木崎城、旗持城、雁海城などが、柿崎一族の居城とされる。雁姫はおそらくその名から推して、雁海城を預る一族の娘として誕生したのではあるまいか。

十二、三歳ごろから、雁姫の美貌は、七郡に並ぶものがない、といわれた。

雪国の女は、肌が白くなめらかであるという。そのうえ雁姫は、冷くさえみえるほどととのった眼鼻立と、名族の裔らしい気品をそなえていた。

平素はあくまでもやさしくしとやかだったが、折々、その漆黒の瞳の奥に、ぱっと火の点ぜられ

ることのあるのに、周囲のものは気づいていた。

雁海城は海に近い。朝に夕に、日本海のくろぐろとした怒濤を眺めて育った雁姫は、冷ややかな外貌の下に、激しい魂を隠していたのであろうか。

どういう事情からか、十三、四歳になった雁姫は、宗家の当主で春日山城内に住む柿崎景家の屋敷に引きとられている。

それから三年余り、雁姫は春日山にあって、平穏な日々を送った。

とつぜんの不幸が雁姫を襲ったのは、天正五年冬のことだった。

その年の十一月、雁姫の庇護者柿崎景家が謙信に殺された。

謙信がなぜ、麾下の勇将をむざむざ手討ちにしたのか、その理由については、古来さまざまに憶測されている。

よく知られているのは、「信長謀略説」である。

景家は、謙信に命じられて尾張へ馬を売りに行った。織田信長はこれを知って、わざと法外の価で買いとり、その上、虎の皮を景家に贈った。信長のこの厚遇をあやしんだものが、あたかも景家が信長に内通したかのように、謙信に讒言したので、謙信はただちに景家を呼びつけて詰問した。そのとき景家が無礼な態度をとったため、謙信は激怒して彼を斬り棄ててしまった。つまり、信長の離間策に謙信がのせられた、というものである。

謙信は義に厚い人格者である一方、ときどき自分でもわけのわからない発作的な怒りにとらえら

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.